

デューイの反省的思考の適用

— 成人看護学臨地実習Ⅰの取り組みに関する報告 その2 —

呉大学看護学部

松原みゆき, 佐々木秀美, 小柳芙美子, 山下 典子
松井 英俊, 岩本 由美, 田村 和恵, 河野寿美代

報告要旨 3年次後期に平成15年・16年度成人看護学臨地実習を履修し、デューイの反省的思考を取り入れ臨地実習を行った、学習効果と教育評価の報告である。学生108名を対象に臨地実習終了後に、アンケート調査を行った。彼らは、2年次後期に「成人看護技術学」授業を受けた学生で、2年次から3年次へと、継続して反省的思考を取り入れた自立的・能動的な学習方法を実践している。学生の自己評価についてアンケート調査の結果、振り返りの時間を持つことは、学生自身が思考するために有効であり、満足感を得ることができたと回答があった。そこで、反省的思考を成人看護学臨地実習Ⅰで実践したことは、高等教育における学習場面において、依存的な学習から自立的な学習への転換となった。まず個人の学習ニーズが能動的に行われるように支援すること、次いで学習者自らが知恵への探求をするための環境作りを行った。その過程について若干の検討を加え、ここに報告をする。

キーワード: デューイ, 反省的思考, 看護過程, 看護技術

■ はじめに

呉大学成人看護学講座において、平成14年度より佐々木が提言している、デューイ¹⁾の反省的思考 (reflective thinking 以下反省的思考とする) を看護場面における思考作用に適用する¹⁾ことを、「成人看護技術学」や「成人看護学臨地実習」で実践している。

本稿は、3年次後期に平成15年・16年度成人看護学臨地実習を履修した学生を対象に、反省的思考を取り入れ臨地実習を行った学習効果と教育評価を試みた報告である。学生108名を対象に臨地実習終了後に、アンケート調査を行った。彼らは成人看護技術学の授業で、佐々木の報告²⁾にある、2年次後期に「成人看護技術学」授業で意識障害のある患者の看護について、教育を受けた学生である。2年次から3年次へと、自立的で能動的に学ぶための学習方法といわれている、反省的思考を取り入れ、継続的に学習をしている。

ここで高等教育の場に反省的思考を看護教育に取り入れる意味について述べる。教育学者でもあるデューイは、1930年代に反省的思考を提唱し、さらに1980年代にはデューイの教育学から影響を受けたショーン³⁾が反省的実践家 (reflective practitioner) の専門家教育を唱えている。そこに共通するのは、反省的思考 (reflection リフレクション) という概念である。教育心理学辞典によるとリフレクションとは、「さまざまな経験を繰り返す過程で、自分の活動を振り返ることによって、その活動の論理を引き出す思考」³⁾とある。近年、教育ツールとしての反省的思考は、看護専門教育においても重要性が実証されていることは、松原⁴⁾で報告した。

特に本田⁵⁾は、ショーンの考えを基本に、看護における反省的思考に関して、行為についての反省であり、事後的で、経験 (実践) から学びを深める学習のあり方であると評価し、議論している。つまり、出来事の後には、あるいは出来事から離れ

* 連絡・別刷請求先

まつばら みゆき

〒737-0004 呉市阿賀南2-10-3 呉大学看護学部

たところで行われる回顧的な反省であると述べている。また看護学生を対象にした報告が多い^{6) - 11)}理由は、学生にとって臨地実習中に自分の行っている看護をその場で振り返る、行為過程における反省は困難であるという見解と関連している。また、本田¹²⁾は、日常の看護の営みを説明する基礎的理論として活用できる可能性を実証している。このことから、看護学生にとって臨地実習が終了した時点で行う振り返りは、学習のために重要であると示唆される。したがって本稿では、臨地実習中のある状況を振り返る反省的思考を用いて、学習を進めることは、学生が実践（経験）から学びを深め、学習効果をあげ、その教育評価をすることが可能であると考ええる。さらに佐々木¹³⁾は、学習者自らが学ぶ学習参加型の教育方法は、学生の主体的な学習に良い方法であると報告している。

今回、学生に行ったアンケートの調査の結果から、実習の場面を振り返る時間を持つことは、学生自身が考え、看護技術を繰り返し練習することから、満足感を得ることにつながったと回答があった。これらのことに鑑み、反省的思考を成人看護学臨地実習Ⅰで実践した実践報告をする。

■ 目 的

本稿の目的は、平成15年度成人看護学臨地実習Ⅰにおいて、反省的思考を取り入れた臨地実習指導を行った。その過程において、反省的思考を看護場面における思考作用に適用した実践報告である。そして有用性の有無を明らかにすることであり、その学習効果を測るための基礎資料とすることにある。

■ 反省的思考に基づく学習目標と方法

成人看護学臨地実習Ⅰの学習目標は、佐々木がデューイの『思考の方法』を手がかりに、看護教育において仮定している、「一つ一つの問題を綿密に考えていくようにしていくことが思考の訓練であり、それが学習である」¹⁴⁾。さらに「経験をし、分析する思考態度の育成が良質の看護を提供することにつながる」¹⁵⁾ことである。

その反省的思考の方法として5項目を適用する。1) 暗示、2) 知性的整理、3) 仮説、4) 推論作用と分析、5) 検証¹⁶⁾である。暗示は情

報収集の手がかりになり、集めた情報は整理され、一つの仮説が得られた後に、分析、統合されて結論に至る。

具体的に、学生の行う臨地実習の看護場面において、反省的思考の作用を以下のように適用¹⁷⁾している。病院での実習を終えた後、学内に戻り、個々の学生は実践した看護を振り返る作業を進める。まず患者との出会いがある。この出会いの時から学生の観察は始められ、少なくとも学生が気になった場面から学習が展開される。つまりなぜ?の疑問から始まり、その疑問を解決するために学習を展開する。そして、実際に患者の健康を障害しているものは何か。健康の回復に向けてケア（看護技術）を展開する。この健康回復促進のためのケア（看護技術）は多岐にわたり、学習者である学生自身の関心を多方向から思考する必要がある。そして、学生個人の体験を各グループ間で話し合い、体験を共有し、共通点や相違点について話し合う。その後、グループから事例を原則として一つ選ぶ。臨地実習では、看護過程にそって実践したことがうまくゆかなかったり、応用したことを実践していたりする看護技術を取り上げ、練習し発表する。この一連の流れが、成人看護学臨地実習Ⅰに反省的思考を取り入れた取り組みである。

■ 反省的思考の実施方法

1. 期 間

期間は、平成15（2003）年10月14日～11月21日までの6週間、成人看護学臨地実習Ⅰである。

2. 対象者

対象者は、3年生108名である。3年生は、5人または6人から構成される20グループに分かれ、1人の教員が1つのグループを担当し、実習指導を行っている。

3. 反省的思考を実践した学習の発表内容

発表内容については、表1成人看護学臨地実習Ⅰ発表内容を参照されたい。

4. 反省的思考をもたらす学習の進め方

成人看護学では、成人看護学臨地実習Ⅰの学内演習を以下のように実施している。

- 1) 原則として、土・日曜日を除き、病院での臨地実習を5日間、学内での実習（オリエンテーションと反省会を含む）5日間の内、3日間は

発表を含む反省的思考を行う時間に当てる。

- 2) グループ毎に各学生が反省的思考を実施した結果、事例の看護過程を展開することを通して、重要であると考えた看護技術を1つ取りあげる。
- 3) グループ毎に、なぜその看護技術を取り上げたのか理由を明確にして、その事例に添った看護技術の必要物品・方法を明確にしたレジュメを作成する。
- 4) グループ毎に学内実習室において、取り上げた看護技術を繰り返し練習する。
- 5) 発表は1グループ30分間で、実演やモデル人形を使って看護技術の発表と、発表後質疑応答を行う(20グループではあるが、実習配置の関係上、発表は全部で21グループ行った)。
- 6) 発表の様子はビデオテープに録画し、発表終了後、教員が講評をする
- 7) 3年生に対して、成人看護学臨地実習Ⅱ終了時に、Ⅰと比較してアンケート調査を行い、学習効果や教育評価の一助とする。

■ 学習効果をはかるためのアンケート調査に関して

1. 対象：成人看護学臨地実習Ⅰ参加者108名(回収率61%)
2. 研究方法：自記式アンケート調査(アンケート用紙は添付資料を参照されたい)
3. アンケート調査実施に関しては、成人看護学臨地実習Ⅰ終了後に学生に口頭で説明し、同意を求めた。アンケート用紙は、後日所定の回収箱に入れるように指示した。
4. 期間：平成15年10月14日～平成16年2月20日
5. 研究目的：成人看護学臨地実習Ⅰで反省的思考を取り入れた。その適用の学習効果を測る基礎資料とする。
6. 調査内容：学生のアンケート調査は、各項目を5段階評価とし、成人看護学臨地実習Ⅰ終了時を基準「3ポイント」とする名義尺度を用いる。臨地実習Ⅱが終了した現在の自己の成長度や反省点を記入してもらう。
7. 自由記載欄の記述
なぜそのように評価したのか、自己評価の理由について、自由記載欄に書かれた内容を記述する。

8. アンケート調査結果

1) 有用性の検討調査の結果

調査は【問1. 知識について】、【問2. 看護技術について】、【問3. 自己の態度について】5段階評価とする。成人看護学臨地実習Ⅰ終了時の状況を基準「3ポイント」と自己評価することを学生に説明し、成人看護学臨地実習Ⅱ終了時の到達段階を問うた。

この結果、全問とも成人看護学臨地実習Ⅱ終了時の到達段階は、基準の「3ポイント」を境に、「1ポイント」・「2ポイント」と低い評価を示した学生群よりも、「4ポイント」・「5ポイント」と肯定的に評価し回答した学生群が多かった。

まず、問1. 知識については、「3ポイント」を付け、成人看護学臨地実習Ⅰの時点と現在の成人看護学臨地実習Ⅱ終了時が、変わらないと評価したのは18%で、それより低く評価した学生群が5%いた。しかし回答者の76%が「知識が増えた」と「4ポイント」や「5ポイント」の肯定的に評価している(図1と表2知識についての到達段階毎の回答者の割合(%)参照)。

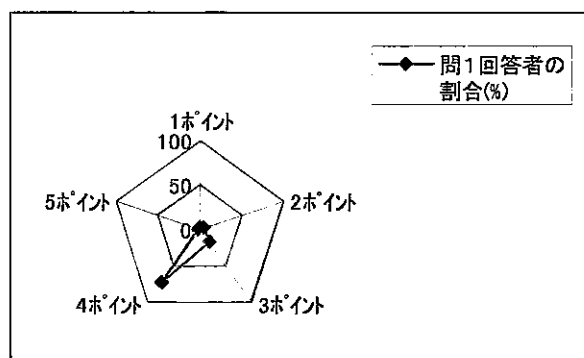


図1 知識について到達段階毎の回答者の割合 (%)

表2 知識について到達段階毎の回答者の割合 (%)

回 答	1ポイント	2ポイント	3ポイント	4ポイント	5ポイント
問1回答者の割合(%)	5	4	18	73	3

問2. 看護技術に関しても、変わらないと「3ポイント」を付け、評価したのは24%で、それより低く評価した学生群が9%いた。しかし回答者の67%が「看護技術が向上した」と肯定的に評価している(図2と表3看護技術についての到達段階毎の回答者の割合(%)参照)。

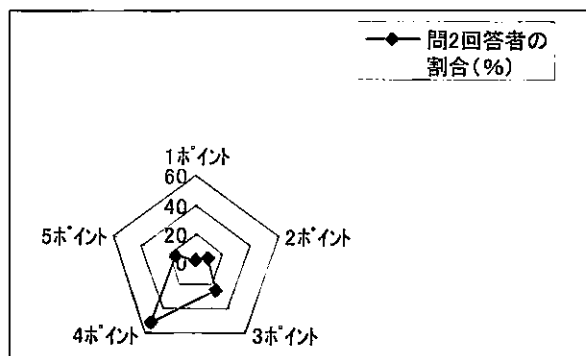


図2 看護技術についての到達段階毎の回答者の割合 (%)

表3 看護技術についての到達段階毎の回答者の割合 (%)

回 答	1ポイント	2ポイント	3ポイント	4ポイント	5ポイント
問2回答者の割合(%)	2	8	24	51	15

問3. 「3ポイント」を付け、変わらないと評価したのは18%で、それより低く評価した学生群が5%いた。しかし回答者の3/4に値する77%が「自己の態度について」肯定的に評価している(図3と表4自己の態度について到達段階毎の回答者の割合(%)参照)。

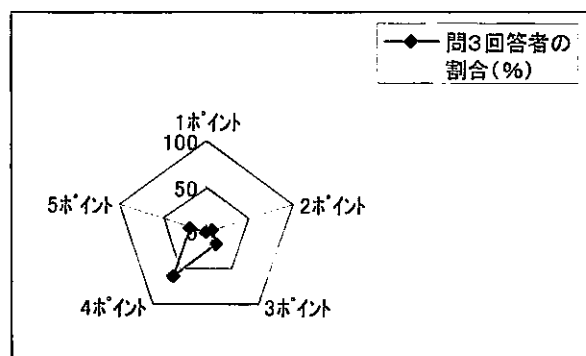


図3 自己の態度についての到達段階毎の回答者の割合 (%)

表4 問3. 自己の態度についての到達段階の割合 (%)

回 答	1ポイント	2ポイント	3ポイント	4ポイント	5ポイント
問3回答者の割合(%)	0	6	18	59	17

2) 自由記載欄の記述内容

自由記載欄に関しては、【問1. 知識について】は、「いろいろな病態と関連して考えることができるようになった」、「根拠について考えて計画を立案し実施につなげることができた」、「実習で得た情報をどのように解釈して実践に生かせばよいのか分かってきた」の記載に代表されるように、知識を関連づけて考えることができたようになったと自己評価していた。

【問2. 看護技術について】は、「個々の患者

に合わせて看護技術を工夫することができた」、「患者のペースを考え、コミュニケーションを通して実施できた」、「繰り返し実施していくことで、準備・手順・実施・片付けの一連の流れがわかり、技術も向上してきたと思う」、「自信につながった」という記載があった。

【問3. 自己の態度について】は、「患者とコミュニケーションがよく図れるようになった」、「指導されたことを活かし次につなげることができた」、「満足感を得られた実習になった」、「反省点をもとに、知識不足は補足して諦めずに取り組んだ」とあった。

以上のような肯定的な評価とともに、「十分ではない自分に気が付いた」という記載もあった。

■ 考 察

学生にとって、臨地実習の場面で、必要なときに必要な看護の知識や看護技術を振り返る行為は困難である。そのため、教員として、学生が実践した後で行う反省的思考が重要であることを、しばしば体験する。

今回、デューイの反省的思考を看護場面における思考作用に適用するための基礎資料を得た。アンケート調査の結果、学生からこの教授方法から学びを得たという回答があった。これは、デューイの反省的思考を実践するために、教員が時間を取り、知識を振り返る作業を行い、看護技術を繰り返し学生に実施させたこと、また学生も2年次の経験を元に、臨地実習の場面で実際に自分自身が体験したり、見たりできたことを振り返ったことに起因すると考えられる。つまりうまくできなかった理由や、もっと患者にとって合う方法があるのではと思考した所以であろう。これらのことから、学生からこの反省的思考を取り入れた臨地実習Ⅰに対して、肯定的な評価が多かったことは当然の帰結ともいえる。

一方、青木¹⁸⁾は、看護における反省的思考の潜在的問題について、指導する教師側や学習グループの精神的な負担が増すことも報告している。今回の場合も、教員と学生は自主的に土曜日・日曜日・時間外を使って学習をすすめた。さらに、看護技術の発表も実践同様に、物品の準備や実施を行った。終了時に学生や教員から実施した看護技術の根拠や安全性に関して、厳しく質問をする場面もあった。それは、学生にとって達成感や充

実感だけではない、実際の看護技術に関わることの厳しさを学んだ体験でもあったといえよう。

佐々木¹⁸⁾は、特に看護技術に関わる教育では、実際に行っているところを見ること、実践すること、繰り返し訓練することが大切である。さらに、医療的・看護技術を実際の患者の健康障害と健康水準と関連づけることを求めている。今回、学生のアンケート調査の自由記載欄に、繰り返し行うことで自信を持ったことや、個々の患者に合わせて援助することから、患者全体をとらえて関連づけることができたという回答があった。

回収率が61%と低かった理由は、アンケート用紙の回収の仕方に関して、アンケート配布場所と回収場所の場所と時間が離れていたことに起因することと、本学習形態に不賛成の意思表示とも取れる。今年度の学生の評価だけから言えないが、佐々木の示した教育目標の達成に近づいたとも言

えよう。さらに一つ一つの問題を綿密に考えていることが思考の訓練であり、経験をし、分析する思考態度の育成が良質の看護を提供することにつながると考えられる。

■ おわりに

今回のアンケート回収率が61%と低いことから、3年生全体の意思を反映していない可能性もある。しかし、今後も学習を進める過程で、2年生後期にある「成人看護技術学」と各論実習初期にあたる3年後期に「成人看護学臨地実習Ⅰ」において、継続してこの学習方法を実践する予定である。この反省的思考を用いたことによる学習効果や教育評価に関しては、今回の基礎資料を基に、さらに検討を重ねる必要がある。

注

*1 ジョン・デューイ (John Dewey) : 1859-1952年没は、アメリカのヴァーモント州のバーリントンに生まれた。現代アメリカのプラグマティズム (pragmatism 実用主義) の代表的学者として、その活動は哲学・心理学・教育学など多方面にわたり、数多くの著書、論文を出している。デューイは長い生涯にわたり学問的活動を続けた。本論文では「思考の方法—いかに我々は思考するか—」を基にしている。この原著初版は1909年に公表され、1933年に改訂増補版を著している。デューイ哲学は、ジェームズ (William James) 心理学を一機縁として出発し発展したダーウィン主義もしくは進化論の立場からすることに対して、強い示唆と刺激を与えている。デューイは、意識生活にも生物の外形的生活に働く進化の法則と同一の法則が働くとする。つまり精神の発展にも身体に至る生命体の発展と同様な法則が働くと考えている。この立場から思考作用を究明している。

*2 ドナルド・ショーン (Donald A. Schon) : 1931-1997年没、ボストンに生まれる。哲学、音楽など様々な分野に造詣が深く、「反省的実践家」を育てる専門家教育、学習組織論の動向や業内教育システム構築を行う。「反省的実践家」については、「The Reflective Practitioner」, 佐藤学・秋田喜代美訳、専門家の知恵、ゆるみ出版、2001。に詳しい。そこでは新しい専門家像を示し、さまざまな専門職において機能している専門家の知恵を事例研究によって詳細に描き出している。

引用文献

- 1) 佐々木秀美：看護教育における思考訓練の重要性—デューイの反省的思考論を手がかりに、明星大学 教育学研究紀要 第18号：39-47, 2003.
- 2) 佐々木秀美：看護基礎教育における技術学に関する若干の考察—学習者参加型学習法を成人看護技術学に取り入れて—, 看護学統合研究 5巻2号：55, 2004.
- 3) 教育心理学辞典, 教育出版, 1996.
- 4) 松原みゆき：デューイの反省的思考 (reflective thinking) の適用—成人看護学臨地実習Ⅰの取り組みに関する報告 その1—, 看護学統合研究, 5巻2号：19, 2004.
- 5) 本田多美枝：看護における「リフレクション (reflection)」に関する文献的考察, Quality Nursing 7(10)：877-883, 2001.

- 6) 武藤真佐子ら：リフレクティブシンキングとグループ学習を用いた統合学習効果 成人看護学臨地実習後に連動する学内演習. 看護総合科学研究会誌 6 巻 1 号：3-11, 2003.
- 7) 永井睦子ら：看護教員研修における授業研究とその意義—仲間との共同による差異化リフレクション, 神奈川県立看護教育大学校紀要 第26号：1-8, 2003.
- 8) 田村由美ら：リフレクションを行うために必要なスキル開発—オックスフォード・ブルックス大学における教授方法実践例—, Quality Nursing 8(5)：419-425, 2002.
- 9) 辰巳理恵：臨地実習における指導者の関わり—リフレクションのプロセスをとおしての見方の変化—, 神奈川県立看護教育大学校 看護教育研究集録 No.27：107-113, 2002.
- 10) 上野玲子ら：看護学教育初期段階におけるコミュニケーション技術・カウンセリング技術教育についてのリフレクション, 秋田桂城短期大学紀要 第8号：27-44, 2000.
- 11) 吉村恵美子：教師がリフレクションをする意味について—成人看護学「呼吸機能障害患者の看護」の授業展開を振り返って—, 神奈川県立看護教育大学校 看護教育研究集録 No.23：1-7, 1998.
- 12) 本田多美枝：Schon 理論に依拠した『反省的看護実践』の基礎的理論に関する研究—第二部 看護の具体的事象における基礎的理論の検討—, 日本看護学教育学会誌 Vol.13 No.2 Dec：17-33, 2003.
- 13) 1) 前掲：44
- 14) 1) 前掲：46
- 15) 1) 前掲：41
- 16) 7) 前掲：57
- 17) 青木由美恵：リフレクションの実際—Gibbs のリフレクティブ・サイクルを活用して—, Quality Nursing 9(2)：147-156, 2003.
- 18) 7) 前掲：57

参考文献

- 阿曾洋子：看護過程（ナーシングプロセス）.
- 氏家幸子・阿曾洋子，基礎看護学技術Ⅱ 第5版，医学書院，東京：233, 1994.
- John Dewey：How we think. 植田清次訳，思考の方法—いかに我々は思考するか，東京，春秋社：17, 1955.
- 村松照美：健康学習支援における保健婦の力量形成過程の分析—澤本のリフレクション方法を活用して，保健婦雑誌 Vol.57 No.13：1070-1075, 2001.
- 中津川順子：デューイの経験論と実習教育 Quality Nursing 5(8)：577-582, 1999.
- 澤本和子：教師の成長・発達と授業研究，澤本和子：教師の発達を支える授業リフレクション研究方法の開発，平成7年度～平成9年度 科学研究費補助金基盤研究（C）課題番号07680226 研究報告書：1-72, 1998.

表1 成人看護学臨地実習Ⅰ発表内容

発表日	グループ名	病棟名	学習内容	名前	年齢	性別	事例紹介	経験後の反省的思考
10月26日-27日	1	慢性期病棟	そう痒感に対する援助ー肝硬変でハッカ水の貼付をする患者	A	70歳代	女性	肝硬変・肝不全の患者	肝細胞実質の障害により黄疸が出現し、そう痒感が生じている患者の清拭の看護技術を振り返り、有効な清拭方法を演習する
	2	呼吸器等の内科	死後のケア	B	80歳代	男性	肺癌が肺転移しており、呼吸不全となり呼吸停止を来して心停止となった患者	実習中、二人の学生が死後のケアを体験することができた。死後のケアは授業でデモンストレーションはせず、プリント上で学んだだけだったので、グループ内で実際に援助した内容を話し合い、学びを共有した。死後のケアは、患者に行う最後の重要なケアであり、希少な体験であるため振り返り、モデル人形を用いて死後のケアを実演する
	3	外科・整形外科	呼吸音と腸音の測定部位と順序	学生2名	20歳代	男性	健康な成人男性	呼吸音と腸音の聴取の看護技術に関して、振り返り測定部位と順序を明確にした実演を行った
	4	整形外科	一般論とK氏の比較による左大腿骨頭内側骨折患者のリハビリ	C	70歳代	女性	左大腿骨頭内側骨折の患者	老年期であるため、身体の衰退が著明であり、床上安静（ベッドアップ80度まで、バルーン留置）が必要な患者の特徴を生かしたりリハビリを振り返り、実演する
	5	内科	失語症のある片麻痺患者の寝衣（かぶり）の着脱	D	70歳代	男性	脳梗塞（右中大脳動脈の閉塞）により、感覚性失語症、右上下肢完全麻痺、神経因性膀胱がある。既往歴として、昭和63年に糖尿病、高血圧、高脂血症もあり、全介助が必要である患者	寝衣（かぶり）のシャツしか持っていない片麻痺患者の寝衣交換の方法について、看護技術を振り返り、実演する
	5	内科・外科・皮膚科	四肢・体幹麻痺患者の石鹸清拭	E	40歳代	男性	くも膜下出血（右対側動脈解離性動脈瘤）・水頭症 既往歴：高血圧・高脂血症・脂肪肝の患者	E氏は、四肢・体幹の麻痺・呼吸・嘔吐・嚥下・排尿中枢に以上をきたしている状態である。そのため、皮膚の乾燥、角質の脱落、発汗による汚れがあり不快に感じている。自分でセルフケアをすることができない。また気管切開による人口呼吸器装着をしているのでその不快感を伝えることが難しい状態にある。これは清潔の維持が困難であることを意味し、精神的苦痛、褥瘡や感染を起す危険がある。ただ清拭するだけではその汚れを拭き取ることは困難であり、石鹸を使った清拭を行い、清潔の維持に努めてゆく必要があるため、振り返り、実演する
	6	循環器	左大腿骨転子部外側骨折患者のリハビリ&ビデオ	F	80歳代	女性	10月1日転倒による右大腿骨転子部骨折（外側骨折）のため観血的手術を実施。10月15日から荷重1/3許可となった患者	今年に入り2度目の骨折であり、年齢からも骨粗鬆症と筋力低下が考えられる。さらに長期臥床による筋力低下と再転倒・骨折の不安は大きい。そのため筋力の増強を図る必要がある。その際、年齢や視覚障害・痴呆症状を考慮したりリハビリ指導を振り返り、実演する

発表日	グループ名	病棟名	学習内容	名前	年齢	性別	事例紹介	経験後の反省的思考
2003年11月 5日と7日	7	慢性期病棟	ADL拡大のための援助ー血行促進のための足浴	G	70歳代	女性	慢性心不全、気管支喘息のため入院中で、脳梗塞の既往があり、左下肢の不完全麻痺があり、リハビリを行っている患者	終日ベッド上で過ごし、入院前と比べ、運動量の減少と心不全と貧血による末梢の血行障害があり、下肢の血行を促進することにより、リハビリの効果が上がり、自信をつけて歩行することにつながる足浴方法を振り返り、実演する
	8	呼吸器等の内科	死後のケア(処置)と解剖	H	60歳代	男性	肺癌、肝硬変、食道静脈破裂 平成9年から肝硬変、糖尿病でK病院に通院していたが不規則で、コントロールも不良。平成14年10月左胸水有り。平成15年5月・咳が出て、左上葉、左肺門部に発生した肺癌が右上葉に転移。すでに上大静脈症候群(上大静脈閉塞症候群とは上大静脈が外部からの圧迫や血管内閉塞により、心臓への血液の循環障害をきたして、頸部・顔面・上肢にうっ血を生じる症候群。原因には、右上葉肺癌で右傍気管リンパ節や前縦隔リンパ節に転移した場合に多い。)が完成し、右胸腺群皮静脈怒張し(メズサの頭)、食道狭窄も顕著	死後のケアと解剖を見る機会が少ないため、その方法を振り返り、モデル人形を用いて実演する
	9	外科・整形外科	2事例の床上安静患者の更衣・シーツ交換	I	70歳代	女性	左肺腫瘍 癌性胸膜炎 平成14年6月左肺腫瘍切除術を受け、平成15年6月から8月、化学療法目的でY病院に入院し、その後自宅療養となる。10月下旬ごろから労作時に息苦しさ、倦怠感、ふらつきが増し、入院となった患者	I氏やJ氏のような様々な患者について、疾患の病態を知り、状態別にみた上で、更衣・シーツ交換の看護技術を振り返り、実演する
				J	80歳代	男性	平成15年10月に転倒により右大腿骨頸部骨折で入院中の患者。既往歴として不安神経症がある	
	10	内科	全身滑拭ー脳梗塞による左半身不全麻痺・失語症・感覚障害のある患者の滑拭	K	70歳代	男性	脳梗塞(右中大脳動脈の閉塞)により、感覚性失語症、右上下肢完全麻痺、神経因性膀胱がある患者。既往歴として、昭和63年に糖尿病、高血圧、高脂血症もあり、全介助が必要である	脳梗塞による感覚障害・片麻痺による体位保持困難・失語症による意思疎通困難のあるK氏に対して、どのような方法を用いれば、清潔を維持し、爽快感を得る滑拭の看護技術を振り返り、実演する
	11	外科・脳神経外科	両下肢切断患者の車椅子移動	L	80歳代	男性	糖尿病のため、両下肢切断している患者	両下肢切断後、移動は車椅子で行い、移乗するためには介助が必要なL氏の車椅子移乗技術を振り返り、有効な方法を実演する
	10.11	整形外科	大腿骨頸部骨折患者のリハビリテーションと移動動作	M	70歳代	女性	左大腿骨転子部外側骨折の患者	術後20日目まで体重免除免除の指示が出ている。術後26日目、軽度の肺炎で呼吸困難の恐れがあるため、リハビリ開始の前にパルスオキシメーターを付けて、SpO2を測定し、体重1/3まで荷重制限の指示が出ているM氏のリハビリ援助技術を振り返り、実演する
	12	内科・外科・皮膚科	大腸内視鏡検査(下部消化管内視鏡検査)について	N	70歳代	女性	胆嚢結石症および貧血の原因精査のために入院した。右股関節骨折と左股関節人口骨頭置換術を行っているため、介助により歩行している患者	検査を行う前から退院までの一連の流れ(処置や観察項目)をデモンストレーションし、下部消化管内視鏡検査の看護を共有するため振り返り、実演する
	13	循環器	循環器病棟での検査の流れー冠動脈造影検査(CAG)を通して	O	60歳代	女性	狭心症と診断され、CAGを受ける患者	CAG検査を行う前から退院までの一連の流れをデモンストレーションし、循環器疾患の特徴を共有し、アセスメント看護技術を振り返り、実演する

発表日	グループ名	病棟名	学習内容	名前	年齢	性別	事例紹介	経験後の反省的思考
2003年11月 16日-17日	14	慢性期病棟	右脳神経麻痺患者のADL拡大のための食事の援助	P	80歳代	女性	脳血管障害（脳梗塞）、糖尿病、うつ血性心不全、慢性心不全、脳梗塞（左基底核）の後遺症により右半身不全麻痺、言語障害がある患者	P氏の食事におけるADL拡大を促すための食事介助技術を振り返り、実演する
	15	呼吸器等の内科	臨終時の看護と死後の処置	Q	80歳代	男性	深部静脈血栓症、高血圧、腎機能障害、老人性痴呆、肺炎のある患者	実習3日目に3病棟で2名亡くなった。その際、2名の学生がそれぞれの患者様の死後の処置を体験することができたが、今までに経験したことがなかった死後のケア処置のために大きなショックを受けた。しかし、その経験を今後の実習に活かすために振り返り、実演した
	16	外科・整形外科	臥床と座位の時の呼吸の観察	R	70代	男性	急性肺炎（右肺） 既往：H12年肺炎を患い、全体的に肺の換気機能が低下している患者。治療は酸素療法（O2マスク 3L）を行ない、受け持ち時SpO2値が95%を超えることはなかった。頻回に黄色痰の咳出がある。呼吸数33～35回/分（安静時）	臥床と座位の時の呼吸の観察技術を振り返り、実演する
	17	内科	脳梗塞患者の口腔ケア	S	70代	男性	脳梗塞（右中大脳動脈の閉塞）により、感覚性失語症、右上下肢完全麻痺、神経因性膀胱がある患者。既往歴として、昭和63年に糖尿病、高血圧、高脂血症もあり、全介助が必要である。	糖尿病により、口腔内感染を起こす危険性があり、介助を必要とするKさんに有効な口腔ケアの看護技術を振り返り、実演する
	18	外科・整形外科・脳神経外科	排泄の援助	T	70歳代	女性	脳血栓症の疑いで検査入院し、左半身の感覚障害が生じている患者	病棟内歩行の許可は出ていたが、臥床による筋力の低下と貧血によるふらつきと不安のため、活動量が低下し、検査以外は床上で生活している。排泄は、6人部屋の真ん中のベッド脇のポータブルトイレで行い、臭気を気にしている。入院前は毎日ヨーグルトを食べ、排便習慣があった患者に排泄の援助を行ったことを振り返り、実演する
	19	内科・外科・皮膚科	不安を表出するためのコミュニケーション技術（ロールプレイの実演）	U	50代	男性	肝細胞癌 ADLは自立しており、人に助けを求めない正確である。今回2回目の抗癌剤肝動脈内注入療法（TAI）目的で入院している患者	TAI前後のU氏の不安に対する看護を振り返り、ロールプレイを実演する
	20	循環器	直達牽引患者の清拭・手浴	V	70歳代	男性	右とう骨・尺骨遠位端開放骨折のため、10月24日より直達牽引中で、ベッド上安静。臀部は挙上できる。牽引により、右上腕が引き上げられないように、砂袋で両端を固定している。日常生活に介助が必要な患者	整形外科の特徴である牽引をしている患者を受け持ち、ADLの制限が大きく、清潔保持も困難であった。牽引中の患者としない患者の清拭の相違点を振り返り、実演する

成人看護学アンケート

2003年12月19日
成人看護学領域教員

成人看護学臨地実習のまとめ

成人看護学臨地実習Ⅱが終了しました。皆様お疲れ様でした。多くの学びが得られたことと思います。

さて、みなさんの学びを、私達教員が次回の実習に活かしていくために、簡単なアンケートとコメントをいただきたいと思います。視点として、実習Ⅰを終えてからの、自分の学びをお聞かせください（自己の成長度、反省点など）。

実習Ⅰ終了時の自己を3ポイントとして、現在の自己を5段階評定として1ポイントから5ポイントにチェックをしてください。

無記名ですので自由に書き、回収ボックスへ入れてください。

1. 知識について
☐ 1ポイント ☐ 2ポイント ☐ 3ポイント ☐ 4ポイント ☐ 5ポイント

自己の成長度、反省点など

2. 看護技術について
☐ 1ポイント ☐ 2ポイント ☐ 3ポイント ☐ 4ポイント ☐ 5ポイント

自己の成長度、反省点など

3. 自己の態度について
☐ 1ポイント ☐ 2ポイント ☐ 3ポイント ☐ 4ポイント ☐ 5ポイント

自己の成長度、反省点など